

平成23年度

第2回 富山高等専門学校 運営諮問会議

会 議 録

平成24年2月23日（木）

平成23年度 第2回 富山高等専門学校 運営諮問会議

日 時：平成24年2月23日（木）午前10時

会 場：富山高等専門学校本郷キャンパス大会議室

【会議次第】

1. 開会挨拶

2. 出席者紹介

3. 議 事

(1) 平成24年度入学試験状況について

(2) 平成23年度進路状況について

(3) 富山高等専門学校 平成23年度 年度計画実施状況について

(4) プロジェクトの紹介

① ALL SHOSEN 学び改善プロジェクト

② 国際的に活躍する実践的な技術者への「ロードマップ」プロジェクト

4. 閉会挨拶

【出席委員】

〔敬称略、順序不同〕

遠藤 俊郎（富山大学学長）
石塚 勝（富山県立大学工学部部長）
高田 勇（富山県中学校長会会長）
松田 登（富山高等専門学校技術振興会会長）
松坂 武彦（社団法人全日本船舶職員協会副会長）
正橋 哲治（立山科学グループ管理部人材開発グループグループ
マネージャー）

<代理>

浜屋 茂（株式会社ユニゾン管理部管理担当部長）
（梅田 ひろ美 株式会社ユニゾン代表取締役社長の代理）

【欠席委員】

木下 晶（富山県教育委員会県立学校課課長）
黒田 輝夫（富山県中小企業団体中央会会長）
犬島 伸一郎（財団法人北陸経済研究所理事長）
金岡 純二（公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長）
山口 光三（富山商船同窓会会長）

【富山高等専門学校出席者】

米田 政明（校長）
丁子 哲治（副校長）
成瀬 喜則（副校長）
本江 哲行（教務主事）（本郷）
遠藤 真（教務主事）（射水）
川淵 浩之（学生主事）（本郷）
水谷 淳之介（学生主事）（射水）
安田 賢生（寮務主事）（本郷）
水本 巖（寮務主事）（射水）
梶 伸司（国際教育センター長）
飯嶋 裕一（事務部長）
杉森 伸平（囑託）

中三川 敏 之 (総務課長)
中 島 鉄 行 (管理課長)
梅 村 智 文 (学務課長)
伊 藤 幹 雄 (学生課長)
上 木 祐 一 (学生課課長補佐)
藏 川 一 正 (総務課課長補佐)
清 水 由美子 (総務課主査)

〔開会 午前10時01分〕

1. 開会挨拶

【飯嶋事務部長】 本日はお忙しい中、またお足元が悪い中、委員の先生方にはお集まりいただきまして、ありがとうございました。

ただいまから、平成23年度第2回富山高等専門学校運営諮問会議を開催いたします。

議事に入るまでの間、進行を務めさせていただきます事務部長の飯嶋です。よろしくお願いいたします。

初めに、開会に当たりまして、本校米田校長から皆様にご挨拶を申し上げます。

【米田校長】 おはようございます。

委員の皆様には、お忙しい中、また今日は足元の悪い、霧まで出ているようですけれども、お集まりいただきまして、ありがとうございました。松坂委員にあっては遠路おいでいただきまして、本当にありがとうございます。

この富山高専の運営諮問会議は、年2回開かせていただいています。今年度第1回は昨年の7月でした。独立行政法人は5年のスパンで中期目標計画期間を設けていますが、今、第2期の中期計画の期間で、これは平成21年からの5カ年ですので、23年度はちょうど真ん中の年となります。その年度計画をお示しして、いろいろアドバイスをちょうだいしていました。

本日は今年度第2回目ということで、その年度計画の実施状況を中心に説明させていただきたいと思っています。

それぞれのお立場からアドバイス、特に辛口のコメント等をいただければと思っています。

独立行政法人の制度組織の見直しの基本計画も閣議決定されたところです。国立高専機構は成果目標達成法人に分類されています。目標を立て、それを達成するための計画を実行し、それを次の改善に使うといったPDCAサイクルを回していくためのものです。

この会議もそのように位置づけさせていただいていますので、本日もどうぞ本校の運営に忌憚のないご意見、アドバイス等を下さいますようお願い申し上げまして、挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

2. 出席者紹介

【飯嶋事務部長】 本日まで出席いただいています委員の皆様をご紹介します。

富山大学長 遠藤俊郎様。

富山県中学校長会会長 高田 勇様。

富山高等専門学校技術振興会会長 松田 登様。

社団法人全日本船舶職員協会副会長 松坂武彦様。

株式会社ユニゾーン代表取締役社長 梅田ひろ美様はご都合のため、代理といたしまして管理担当部長 浜屋 茂様。

立山科学グループ管理部人材開発グループグループマネージャー 正橋哲治様でございます。

また、富山県立大学工学部長 石塚 勝様におきましては、大学の業務のために遅れてご出席されるということですので、後ほどの紹介となります。

なお、富山県教育委員会県立学校課長 木下 晶様、富山県中小企業団体中央会会長 黒田輝夫様、財団法人北陸経済研究所理事長 犬島伸一郎様、公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長 金岡純二様、富山商船同窓会長 山口光三様におかれましては、ご都合により本日まで欠席となっております。よろしくお願いいたします。

続きまして、同席させていただきます本校関係者を紹介させていただきます。

改めて、米田校長です。

副校長の丁子教授です。

同じく副校長の成瀬教授です。

教務主事（本郷キャンパス）の本江教授です。

同じく教務主事（射水キャンパス）の遠藤教授です。

学生主事（本郷キャンパス）の川淵教授です。

同じく学生主事（射水キャンパス）の水谷教授です。

寮務主事（本郷キャンパス）の安田教授です。

国際教育センター長の梅教授です。後ほどプロジェクトの紹介をしていただきます。

嘱託の杉森です。

総務課長の中三川です。

管理課長の中島です。

学務課長の梅村です。

学生課長の伊藤です。

その他、総務課、学務課の事務職員がいますので、よろしくお願ひいたします。

引き続きまして、本日、皆様のお手元に配付しています資料の確認をさせていただきます。

(資料確認——記事省略)

【飯嶋事務部長】 本日の会議の予定ですけれども、この場で12時まで協議いただく予定にしています。その後、委員の皆様方には、応接室で昼食をとりながら、本校校長、副校長との懇談をしていただき、13時に閉会という予定を立てています。

また、本日の議長につきましても、前回第1回でご選出いただきましたとおり、遠藤富山大学長にお願いしたいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

それでは学長、議長席へよろしくお願ひいたします。

(遠藤議長 議長席へ移動)

3. 議 事

(1) 平成24年度入学試験状況について

(2) 平成23年度進路状況について

【遠藤議長】 それでは、本年度第2回の富山高等専門学校運営諮問会議の議長を務めさせていただきますので、会議を始めさせていただきます。

春にさまざまな意見交換をさせていただいて、今回は今年度の活動、来年度の活動予定についての議論が交わされるものと存じますが、本当にこの1年間、高専のさまざまな活動を拝見させていただいていますと、米田校長をはじめ皆様のご努力で、いろいろなアプローチ、活動がなされてきていると感じます。

本日の運営諮問会議の皆様のご意見によって、さらなるご発展がなされることを期待しつつ、議論を交わしたいと存じます。よろしくお願ひいたします。

それでは議事に入らせていただきますが、まず初めに、1番目の議題、平成24年度入学試験状況並びに23年度進路状況について、米田先生からご説明をお願いしたいと思います。

【米田校長】 それでは、お配りしています資料に沿って説明したいと思います。

まず、資料1「平成24年度入学試験状況について」をご覧くださいと思います。

本校は人材育成機関ですので、志願者がいて試験に合格して入ってきてくれることが基本になりますが、その試験状況についてご説明します。

上の表は、平成20年から平成24年度まで、今入試の合否判定をしているところですが、定員と志願者数を本郷キャンパスと射水キャンパスに分けて表にしています。

ご案内のように、本校は2年半前の平成21年10月に、旧工業高専と旧商船高専が統合して新しい富山高専になっています。本郷キャンパスは旧工業高専、この会議室等があるキャンパスです。射水キャンパスは旧商船高専で、今、射水市新湊にあります。

大きな違いがそれまでありまして、旧工業高専は県立高校との掛け持ちが実質的にできないタイプの専願制をとっていました。射水キャンパスは、併願制と言いまして、実際、県立高校との掛け持ち受験ができるという受験制度を持っていました。これは学力入試の分です。推薦入試はその性格上、もともと専願と考えています。

1つの学校でありながらキャンパスごとに制度が違うのはいかがかということで、ご案内のように、24年度、今回の入試から統一入試にしました。学力は両キャンパスともに併願制にしました。

それを前提でご覧いただきたいと思いますが、グラフにしています。上が志願倍率の推移で、青が本郷キャンパスに設置している学科に関するもの。24年度、ぐんと倍率が上がっています。一般に併願制にしますと上がるのが期待されるわけですが、現実に上がっています。

志願者数が下のグラフですが、これも同様の傾向を示して、402人の志願者がいました。射水はもともと併願でやっいまして、倍率も3倍から4倍を維持しています。ここ1、2年、若干下がっているようにも思いますが、もともと高い志願倍率と志願者数を持っています。

全体としては、推薦で定員の約5割をとっています。これは1月の最終週ぐらいにやっています。学力は、今回、先週の日曜日が試験日で、今、採点、合否判定業務をしているところです。

推薦で惜しくも落ちた志願者は学力に回ります。しかし、この数字はその重複カウントはしていません。何人受けてくれるかということにしています。

これが入学試験状況で、平成24年度は統一入試方式で、両キャンパスともに倍率、志願者数がぐんと増えた状況になっています。

裏のページは、今説明させていただいたことを各学科別にまとめた表です。

新しい富山高専は、それまで両高専は4足す4の8学科でしたが、これが合わせて6学科になって、工学系4学科の間で第2希望も認めています。そういう制度にしています。

今度は出口といえますか進路状況について、資料2をご覧いただきたいと思います。間もなく卒業のシーズンを迎えますが、今年度卒業予定者、修了予定者の進路状況です。

上の表は学科です。学科に関しては、旧工業高専の4学科、旧商船高専の4学科の8学科分です。その下の専攻科に関しては、本科の上の2年の課程を修了する予定者の進路を表にまとめています。

これを円グラフにしたものが、下の学科卒業予定者の進路状況です。

進学は、大学の3年に編入学していく者と本校の専攻科に進学する者、両者合わせて全体の半分弱。一方、全体の半分強が就職するわけですがけれども、これを県内就職と県外就職に色分けしてグラフにしています。約半々です。

本校の特色としては、就職する者のうち県内に就職する者の比率が結構高いことが言えるかと思います。これは、県内に受け皿、ものづくりを中心とした企業が多数あることもその1つの大きな要因になっていると思っています。

下は、専攻科を修了する予定の学生の進路です。大学院に進学する者が全体の4割近く、残りが就職ですがけれども、これも県内就職と県外就職が約半々と。県内で就職する比率は高い方であると思っています。

本科卒業予定、専攻科修了予定ですが、本科は、先ほど言いましたように8学科、1学科の入学定員が40人、320人の中で実際卒業予定者は297人。専攻科は定員が今40人になっています。定員を少し超えて入学しています。卒業予定者、修了予定者も定員を少し超えて57人が修了予定になっています。

その裏と次の2枚目は、具体的に本科を卒業して進学する際の進学先、これが左の列です。国立大学、公立大学、私立大学、その他と。右の2列が就職先、企業名を書いています。

その右のページが専攻科修了予定の者の進学、これは大学院の修士課程へ進学するわけですが、進学先と就職先の一覧をつけています。

以上、資料1、資料2をまとめて説明させていただきました。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

委員の方々からご質問等ありますでしょうか。

【米田校長】 就職の内定率は、高専は本校のみならず比較的どこも高いのですが、今ご説明させていただいたように、未定というところがパーセントでは非常に低くなって、かなりの部分で内定しているということです。

【遠藤議長】 23年度進路状況というのは、今度の卒業生ですね。

【米田校長】 3月2日に射水キャンパス卒業式、16日に本郷キャンパス卒業式がありますが、そこで卒業あるいは専攻科を修了する学生諸君の予定進路です。

【遠藤議長】 例えば学科ですと97%、専攻科だと98%の方が、もう方針は明確に決まっておられるということ。これは高いですね。

【米田校長】 高いと思います。

【遠藤議長】 ほかの大学に比べると、うちなどに比べると高いと思います。すばらしいと思います。

【米田校長】 大学は平均的に7割か8割。

【遠藤議長】 富山大学の場合は、1月末の段階で、平均しますと8割ぐらいですね。学部によってばらつきがすごく大きいですけども。

【高田委員】 恐らくこういった学生はいないと思うのですが、例えば旧富山高専系の学生が文系の大学へ進むとか、逆に射水キャンパスの場合、やや文系的な学生が工学部系といった学生というのはいるのですか。そういう道はあるのでしょうか。

【本江教務主事】 今は高専の卒業生につきまして、専門の、例えば工学系だけではなくて、経済、文系、いろんなどころから編入学が可能になっています。ただ、指導上、私もそちらはあまりやっていませんが、医学系、薬学系を除くその他の分野ではすべて編入を受け入れていただいています。

【遠藤議長】 高田さんも、そういう広がりがあるのはうれしいですね。

【高田委員】 そうですね。そうした情報も中学生に与えることができれば、また「じゃ、行ってみようかな」という中学生が増えるかもしれない。それでそういう質問をさせていただきました。

【遠藤議長】 貴重なご質問、ありがとうございます。

【遠藤教務主事】 今は、進学というか、その中の編入学というのは、高専において志願者対策上、非常に重要な位置づけになっていまして、いろんな試みをしています。今、進路の窓口が一番狭まっているのが商船学科という船関係の学科です。それについては今、長岡技科大の経営情報や建設系の環境系などと連携事業を組みまして、商船学科において

も専攻科、海事系以外でどんどん分野を広げるように努力しています。今は新入生のほとんどが編入学を希望しますので、それに応えるように、いろんな分野、もちろん昨年度も本郷キャンパスでは工学系から経済系を一体化する。もう1つが、国際ビジネスから、国際ビジネスは女子学生が多いので、そこで人文系だと就職関係でかなり厳しいところもあるものですから、理系女子にして出しましょうというので、これも長岡技大にそういうルートを今作るように努力しています。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

就職のことは別としても、本当に幅広い人材育成ができるのはいいですね。ありがとうございます。

ほかにありますか。

(発言する者なし)

【遠藤議長】 よろしいですか。

では、ますます新しい形で広げながらという感じですよ。併願制のことも含め、推薦の部分が50%ということですから、なお良い人材、幅広い人材を育成していただける1つの形ができていくのかなと思いました。

ありがとうございます。

(3) 富山高等専門学校 平成23年度 年度計画実施状況について

【遠藤議長】 続きまして、3番目の議題であります平成23年度計画実施状況について、まず米田校長からお願いします。

【米田校長】 今年度、平成23年度の年度計画につきましては、昨年7月のこの会議で説明をさせていただきまして、それにどう実際計画を実施しているのかという実施状況、これが本日議論していただくメインになるかと思いますが、その概要についてまず私から簡単に説明をさせていただきます。

資料3をご覧くださいと思います。A3横の長くて字が小さい資料ですけれども、委員の先生方には、それぞれのお立場から後でいろいろコメントをちょうだいしたいと。割り振りなどもさせていただいています。

資料の作りからご説明しますと、先ほど言いましたように、現在は第2期中期計画のち

ようど真ん中の年度に当たります。その第2期中期計画、平成21年度から5年間ですけれども、本校はどのような計画を立てているのかというのが左の列です。5年間でどういうことをやるのか。これは主務大臣から示された中期目標がありまして、それを達成するための計画です。

最初のページ、「1 教育に関する事項」が(1)から(6)まで6項あります。1番が入学者の確保に関するもの、これが①から⑤まで5項目。1/9ページの下、「(2) 教育課程の編制等」が①から後ろのページの⑥まで6項目。「(3) 優れた教員の確保」が、2/9ページから3/9ページにかけて①から⑦までの項目。「(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム」が、3/9ページの①から4/9ページの⑨まで9項目。「(5) 学生支援、生活支援等」が5/9ページの①から④まで4項目。「(6) 教育環境の整備・活用」が①から③まで。以上、教育に関する事項が6つ。

大きな「2 研究に関する事項」、これは両括弧で分類されておらず、直接①から7/9ページの③までの3項目。「3 社会との連携、国際交流等に関する事項」、これに大分力を入れるようにということですが、これに関しても両括弧で分類はせず、①からそのページの下⑨までの9項目。最後に近づきますが、8/9ページ目には「4 管理運営に関する事項」、これは①から次の9/9ページの⑤まで。その下が「5 その他」。次に、大きなⅡ番、Ⅲ番と続いています。Ⅱ番が業務上の効率化に関すること、Ⅲ番が予算に関することです。このような項目分類になって、それぞれの中にぼつぼつと事項がたくさんあります。

この中期計画を、真ん中の年度である平成23年度はどういう計画で達成しようとしているかというのが真ん中です。それぞれの中期計画事項に対して、これも同じ○で恐縮ですが、3個、4個、5個と年度計画を立てています。

末尾に「(継続)」と書いてあるのは、昨年度からの継続、次年度へ継続していくという意味の継続。「(新規)」というのは、今年度から新たに取り組む年度計画。そのようにご覧いただきたいと思います。

それぞれの計画に対して、○を対応させる形で一番右に大きな列があります。これが年度計画の実施状況になります。それぞれに対してこのように実施していますという具体的な実施状況が記載されています。

このような作りの資料になっています。

本校は51ある国立高専の1つですが、これを束ねている独立行政法人が国立高専機構で

す。機構も全体としてももちろん第2期中期計画を立てています。今ご説明した本校の中期計画は、機構本部が立てている中期計画とそこを来さない範囲で、各項それぞれ特徴を出すように作られています。またそのような機構本部からの指示もあります。

本校は2年半前に統合した、いわゆる「高度化再編校」と言っていますが、「スーパー高専」あるいは「地区の拠点校」と言われたりしています。

地区としては全体51高専を8地区に分けて機構本部は運営していますが、本校は東海北陸地区8校のうちの1校になります。その地区において拠点的な役割をぜひ果たしてもらいたいという要請もあります。

そのような流れの中で、今年度はご覧いただくような年度計画を立てて、途中、去年の秋に、その時点での実施状況の概要を機構本部に報告しています。それに対する本部からのフォローアップもありまして、残りの半年でそれらをクリアする形で実施しているという状況です。

そんな流れの中で、今からそれぞれ個々のご説明をさせていただきたいと思います。

以上です。

【遠藤議長】 分かりました。それでは、個々の部分に関しまして、教育、研究等々と順番に行かせていただきたいと思います。

最初に、教育に関するご説明、「入学者の確保」から始めまして、これ、順番にそういう形で行ってよろしいですか。

【米田校長】 はい。説明者がかわりますけれども。

【遠藤議長】 それでお願いします。どうぞ。

【米田校長】 それでは、「教育に関する事項」のうちの「入学者の確保」については、私から簡単に説明します。

入学者を確保することは大変重要なことですので、志願者対策室と広報戦略室という室を設置して、これらを合わせた形の本部という本部構想を本校は持っています。その本部構想のもとで志願者対策、広報戦略に当たることにしています。

両キャンパスで共同して志願者対策、広報戦略に当たるという意味で、両キャンパスの教員が中学校訪問する際もペアになって、新高専の学科や学校の方針の説明などをさせていただいています。

一番右側の大きな欄で行きますと、①が今申し上げたようなこと、それから両キャンパス共同で種々の資料等を整理しているということです。

その欄の④に関係しますけれども、本校は日本海に面した中部日本海に所在しているということで、東海北陸とはちょっと別のくくりになりますが、富山、石川、福井プラス舞鶴と長岡、「中部日本海5高専」と我々呼んでいます、そこで共同してPRサイトを立ち上げていると。それも宣伝に使っています。

大きな②になりますが、各種入学説明会、体験入学、オープンキャンパス、公開講座、出前授業等、両キャンパスで行った取り組みを今年度も行っていまして、その実績等が実施状況の中に記載されています。

その中で、女子中学生向けのパンフレットを作って、「目指せ女性技術者」という記載が見えますけれども、そのようなホームページも作ってホームページに掲げてあります。その効果が出たのか、従前あまり女子学生が多くなかった学科にも女子の志願者が増える傾向にあります。

新課程になりまして2年半たつわけで、その1期生が今度3年生になります。やがて4年、5年になって旧新が入れかわるわけですがけれども、その新教育課程版の広報、動画を作っていこうということで、これはちょっと長丁場になりますけれども、その準備もしています。

大きな④になりますが、これは平成24年度、今回行っている入試から、「統一入試」と言っていますが、両キャンパス同一の制度によって行っています。1つの入試にしています。これは準備が大変であったわけですがけれども、今、ミスのないように細心の注意を払って合否判定をしているところです。

中期計画では受験者総数を合格者数で割った実質競争率を1.5倍以上確保するという目標を立てていますが、その目標は今のところ十分クリアしているということです。幸い、専攻科に進学する学生も定員を超えておるわけですがけれども、これも積極的にアピールしていくことを考えています。「就職ナビゲーション」というメディアに資料を配布して専攻科をアピールしています。

進路指導支援チームなども作りまして、キャリア教育等を含めて、きめ細かい進路指導の徹底も行っています。

ということで、専攻科も高度化し、志願者もしっかり確保してまいりたいということで取り組んでいます。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

引き続き教育課程の編成について。

【成瀬副校長】 それでは、「(2) 教育課程の編制等」についてご説明申し上げます。

左の欄でいきますと①②ですけれども、まず本科、専攻科の編制と充実等を進めています。

特に専攻科につきましては、学士を取るという目的があります。その一環としまして、例えば本郷でいきますとエコデザイン工学専攻、射水も制御情報工学専攻で、ネイティブの専門の先生を招聘して授業を英語で行っていただくような取り組みを行っています。それによりまして国際性の向上を高めたいということです。

さらに専攻科、本科も含めまして、一番下の欄の①ですが、本校に企画提案ワーキンググループというワーキンググループを設置しまして、まず関連企業のインタビュー等をお願いしたりしながら社会のニーズを調査して、それに基づきまして、本科、専攻科のカリキュラムを再検討して再構築しようという試みを現在行っておりまして、それを今年度中間報告という形でまとめています。

次のページをめくっていただきまして、2/9ページです。

③ですが、高専機構が全高専を対象に、年1回、数学と物理の学習到達度試験というのを高専3年次に行っています。これによりまして、特に数学、物理、主要科目についてどういふところが学力的に弱いか分かるようになっていきます。そういうところを分析しまして、補講等を入れて、成績不振者の学力充実も図っています。

②ですが、文系の国際流通学科、国際ビジネス学科はもちろんですけれども、工学系、商船系も含め、近年はTOEICのスコアアップ、学力向上が重要視されています。そのスコアアップのために、海外のインターンシップを進めたり、学内でもTOEICのための対策をいろいろ進めています。目標スコアを定めまして、全学生がTOEICに向けて学力向上を図っています。

左の欄の④、2つ目の欄ですけれども、学生による授業評価のアンケートや教員相互のピアレビュー、授業参観を通してFDを図っていくという試みです。

まず学生の授業アンケートにつきましては、両キャンパスとも、前期、後期のほとんどの科目で実施しています。それを教務委員会、FD委員会等で分析しまして、どういうところを改善すればいいかというところに向けて検討を進めて授業改善を行っています。

②ですが、FD委員会では毎年それぞれの学科で授業参観を行ってもらいまして、自分の学科の先生はもちろんですが、他学科の先生にも授業を見てもらい評価をして改善する

という試みを開始しています。これによって、いろんなディスカッションを通して授業改善をしていきたいと考えています。

3つ目の枠ですが、ご存じのように、高専の場合はロボコン、プロコン、デザコンといろんなコンテストがあります。そういうものももちろんですけども、高校の大会等にも出場させていただいているということで、運動部、文化部問わず活発に行っているところがあります。

ただ、懸念材料としては、全体の学科数が少なくなっていくということで、例えば団体のチームが成立しなくなる恐れがあります。そのために、今年度から土曜日等にキャンパス間のシャトルバスを出しまして、学生が移動して合同練習ができるようにしてクラブの活性化を図っています。

最後、ボランティアですが、生徒会執行部、ボランティア同好会を通しまして、東日本大震災の募金活動、献血の呼びかけ、また射水の海王丸で毎年やっている総帆展帆のボランティアをさせていただくなど、ボランティア活動を積極的に推進しているところです。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

引き続き米田先生から。

【米田校長】 「(3) 優れた教員の確保」は私から。

左の列の①からまいりますと、まず公募制で教員を採用すること。この方針でももちろん今年度もやっています。

本科においては、博士の学位を有する者を採用する。一般教養科では、修士以上の学位を持った者を採用する。そういう方針に従って公募制で採用しています。

また、本校以外の他機関の経験を有する教員、これは資質向上につながるということで、高専間あるいは高専と技術科学大学間の人事交流にも積極的に人を出す、人を受け入れるようにしています。現に、技科大に派遣する教員を24年度から2年間出すことを決めています。そのようなことが書いてあります。

その技科大ですけれども、長岡、豊橋両技術科学大学、これは高専と特別縁がある大学で、その連携室を設置して連携を図っています。

例えば長岡技科大が、「アドバンスドコース事業」と言っていますけれども、高専に学生が在籍している間にその授業に沿った形の単位を取れば、技科大に3年編入、進学した後でそれが技科大で認められるといったメリットといいますか学生にとって恩典のある制

度もありまして、それについてもモデル校として本校は参加しています。

先ほど遠藤教務主事から話がありましたが、本校の商船学科あるいは国際ビジネス学科のような特色のある、あるいは文系の学科の卒業生が長岡技科大に編入学できるような道を今検討しているということがあります。そういう意味で、技科大との間の連携を通して教員の資質向上を図っていこうということです。

3/9ページになります。学位のことですけれども、その目標比率を持っています。専門学科の先生は、博士の学位を7割以上取っていること。一般科目に関しては、修士以上の学位を8割以上持つようにと。それに向かって、採用は先ほど申し上げたような方針で行っています。内部の教員についてもそのようにまた努力をしています。それから、技術士の資格を博士の資格と同等に認めることにしています。

④になりますけれども、今、男女共同参画が言われています。機構本部の方針も、女性教員を積極的に採用するように、あるいは女子学生を増やすようにということが立てられています。それに対して本校も、女性教職員のための環境整備ワーキンググループを立ち上げて取り組んでいます。

左の列の⑤ですけれども、両キャンパス合同で教員の資質能力の向上を目的としたFD研修会に積極的に取り組んでいます。

最近の学生の中には、メンタルヘルスあるいは発達障害の問題も散見されるようになっていまして、対応に大変難しい面があります。それをテーマとして、両キャンパスが可能な限り研修をして教員間の認識共有を図るということです。そのような事例が発生した場合には、チームを組んでそれに当たっていますので、そういう意味のFD研修会も行っています。

左の列の⑥になりますけれども、顕著な功績が認められる教員グループを表彰するという事で、これは実際は教員だけではなくて職員も含めてですが、教職員の表彰要項を制定して、早速これをもって平成23年度の顕著な功績のある教職員を表彰することとしています。こういうインセンティブについても配慮していることになります。

⑦、最後になりますけれども、国内の内地研究員、在外の研究員の派遣について、要項を整備しました。他の教育研究機関で研修を積んで、本校の教員としての資質向上が大いに期待されますので、この要項に従って推進していくことにしています。

国際学会等への参加ですが、右の列に「I S A T E」と「I S T S」という文字が見えますが、I S A T Eは工学的な技術教育に携わる先生方の研究集会、I S T Sは、専攻科

生が特別研究で取り組んでいます研究の成果を専攻科生が国際的なシンポジウムの中で発表するためのものです。本校もこれに学生を送る、あるいは先生方が参加するようにして、これも資質向上につながっていると考えています。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

引き続きまして、成瀬先生、お願いします。

【成瀬副校長】 では、「(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム」ということで、まず①ですが、新課程に入り今3年目ということで、いろいろな取り組みを行ってまいりました。

幾つかご紹介させていただきますと、まず1年生の段階で、特に工学系の学生が、例えば機械系の学生でも化学等の実験、化学系の学生でも情報系の実験を通して、幅広い技術者を育成したいという目的で、ものづくり基礎工学実験を行っています。これは工学系全部の学科で実施しています。それから、技術者倫理等も必要ということで行っています。

②の専攻科でいきますと、国際ビジネス学専攻、文化系の学科ですが、技術・産業演習という科目で、ものづくりをしながら、その費用対効果を考えさせるといった演習を行っています。

さらに、専攻科、本科でも、こちらにはコマツNTCの話が書いてありますが、県内の企業から来ていただきまして現状を説明していただいたり、必要なスキルについて説明をしていただくといった講義を行っています。

専攻科と本科のカリキュラム等に若干不都合がありました。夏休みに入る時期が若干違ってしまっていて、これを統一しようということで、来年度から専攻科、本科とも8月中旬まで授業を行いまして、そこから夏休みに入ります。9月下旬までを夏休みとして後期の授業に入るという形に移行することに決定しました。

2つ目の欄の②ですが、工学の学生の資格取得ということで、先ほども申しましたが、まずはTOEICをビジネス系の学生、工学系の学生に勧めるために、基準を設けたりしながら受検等を勧めていくということで、本郷キャンパスでも後援会のバックアップでTOEICの受検を増やすという試みを行っています。

高専の場合はJABEEの認定を受けていますが、今年度、射水の制御情報システム工学専攻がJABEEの中間審査を受審して、幾つかの指摘は受けていますが、現段階では適合しているとの報告を受けています。

一番下の欄に行きますと、中部日本海の高専との共同事業で、現在、高専機構が提携を結んでいますタイのキングモンクット工科大学からの学生の受け入れを行いたいということで準備を進めているところです。

次、4/9ページですけれども、一番上の欄に書いてありますが、授業等もちろんですけれども、いろいろなところで両キャンパス融合統一した事業を入れたいということで、こちらには3つの事例が書いてあります。1つは、高専祭を両キャンパス合同で行っています。今年度は本郷キャンパスで行いましたが、射水キャンパスからも出展等を参加して盛り上げると。来年度は射水キャンパスで行うという形で、交互開催を目指しています。また、球技大会、1年生の合宿研修を両キャンパス合同で行うという取り組みを行っています。

次の欄で行きますと、国内外でいろいろな事例をやりたいということで、特に東海北陸地区の高専8校と共同で行うという名目で幾つかの取り組みをしています。1つは、S P I C E という国際教育研究集会を定期的を開催して、富山高専が主にリーダーシップをとりながら国際化の推進を目指すという形を考えています。

1つ飛びまして⑥の欄ですが、本校にはシニアフェローをお願いしている方々が多くおられます。そういう方々に富山高専へ来ていただきまして、いろいろなお指導をいただくということで、シニアフェローからなる企業人材育成研究会を立ち上げまして、いろいろなプログラムを実施しているところです。これによりまして、企業のニーズと本校のシーズのマッチングを図ろうという取り組みです。

1つ飛びまして⑧の欄ですが、長岡技科大といろいろ協働事業を行っています。1つはアドバンスドコースという事業です。まず、協働で事業を行ったものについて、例えば本校でそれを単位化することと、長岡技科大へ進学したときにそれを卒業単位として認定するといった2つの事業を行いながら連携事業を行っているところです。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございました。

それでは、「学生支援・生活支援等」の項目へ進めていただきたいと思います。

【丁子副校長】 「(5)学生支援・生活支援等」について私から説明させていただきます。

まず①ですけれども、これは特に学生のメンタルな部分のサポート、支援をする組織、仕組みを作ろうということで、本郷キャンパスでは「K O S E N C a f e」というところで、できるだけ学生がリラックスして、いろんな悩みをそこで解消できるような仕組み

を作っています。カウンセリングをそこで実施しているということです。射水キャンパスでは「何でも相談室」というものを開催しています。そういう仕組みを作っています。

また、校長と学生との懇談会あるいは学生に対するいろんな講演会を設けています。

さらに、先ほど校長からの説明にもありましたけれども、最近、メンタルな部分ももちろんですけれども、発達障害の学生のサポートということで、特別支援教育室を立ち上げることも行っています。

②の図書館と寄宿舎、寮の問題ですけれども、図書館は両キャンパス、機能が一体化してスケールメリットを生かすということで、そういう趣旨の改修を今進めているところです。

寮は、先ほども説明がありましたけれども、8月の下旬で試験も全部終わり、夏休みが8月の中旬から始まることにしたところ、結局、7月の下旬から8月の下旬の非常に暑いときに寮で生活しないとイケないということで、エアコンの改善を行っています。

授業料の免除制度、奨学金制度は従前どおり、できるだけ学生に利用しやすいような窓口を設けることとしています。

学生の適正や規模に応じた進路選択もより充実させようということで、進路指導室を充実させ、キャリアガイダンス等々の充実を図っています。

「(6) 教育環境の整備・活用」も引き続き説明させていただきたいと思います。

①ですけれども、施設あるいは設備、この辺を戦略的にしっかりと充実を図ろうということで、そういうマスタープランを策定しており、そのマスタープランに従って予算要求をしています。

ここに書いてありますのは、特に体育館がかなり老朽化しているということで、体育館の整備も行っています。さらに、統合した後、高度化した高専を目指すということで、高度化再編に伴う施設整備も順次年度計画に従って進めているところです。

②、特に施設整備のメンテナンスのところですが、今年の3.11の震災以降、電力不足も、富山の場合、あまり深刻ではありませんけれども、省エネ、光熱水料費の削減を行うとともに、あまりエアコンの温度をコントロールし過ぎますと、今度は熱中症などの問題も起こりますので、そういう対策もしっかりと行っています。

エコアクション21、これは本郷キャンパスの方で続けてきたものですが、射水キャンパスも合わせて今年度から実際に取り組みしており、来年度にその受審をするということで進めています。

学生、教職員の健康管理、安全管理についても、いろいろと事故が起こらないようにということで、安全対策をハード、ソフト両面にわたって行っているところです。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

それでは、全体を通して教育関係のところについて皆様のご意見をいただきたいと思いますが、ちょっと時間が遅れていますけれども、よろしくお願ひしたいと思ひます。

6つのパートがあります。前もってお一人ずつ口火を切っていただきたいということでお願ひしていますので、「(1) 入学者の確保」と「(2) 教育課程の編成等」につきまして、高田委員からお願ひできないでしょうか。

【高田委員】 まず、入試の関連業務が非常にシステム化されて丁寧であるという、これは本校の教員もそういうことを言っていますが、また県中学校長会の副会長など何人かにも聞いてみたのですが、同じような回答をいただひていまして、そうした点が従前とはかなり違ひてきているのではないかなと思ひます。

入試の説明についても、先ほども校長先生からお話があったかと思ひますが、2回来校されて、非常に詳しく丁寧、そして私、学校に置いていかれた資料を見させていただいたのですが、非常に細かいところまでに配慮された資料をいただひて、学年担当の者にとっては、保護者、子どもに大変説明しやすいということでした。

また、オープンキャンパスも何回も企画されていますし、親子対象のものもあり、非常に懇切丁寧で、親がかなり乗り気になったという報告も聞いています。

先ほど校長先生は辛口のという、あまり辛口のことを言えなくてあれですけども、出願関係書類があえて言えば辛口になるのか、射水キャンパス、本郷キャンパスに同日、同じ時間帯に発送したのですが、その受理された書類が届く日がキャンパスによって若干違ひがあったと。

これはなぜ都合が悪いかといいますと、学年でそれぞれ受ける生徒を一度に集めて指導する関係上、できたらそういったところまで一緒になればなおいいのかなという希望がありました。

また、本郷キャンパスが県立高校と併願可になったというのは、子どもたちにとってものがすごく受けやすくなった要因であること。今までは、県立高校の入試当日に招集というのがネックになっていたものですから、そうしたところも非常にありがたい。

ただ、中学校側からすれば、これから我々にとって、学校側は織り込み済みだと思ひ

ですが、合格しても行かないという生徒の受験、そこらあたりをどう整理していくのかというところが1つあるのかなと。そうしたところが我々としては懸念するところです。

また、試験会場が非常に多方面になっていまして、魚津でも受験できる、南砺市でも受験できる、これもかなり、本人の負担もそうですし、保護者の負担も非常に軽減されてありがたい措置であるかなというのが今感じとして思ったところです。

ちょっと質問、よろしいでしょうか。質問は後になりますか。

【遠藤議長】 どうぞ。

【高田委員】 推薦50%を確保されている。今、県内の高校の動きとしては、探究科学科以外は全部普通科の推薦はなくなるという傾向にあるわけですが、その裏には、どうも推薦で入った者の追跡調査をしてみるとそんなに、いわゆる調査書に見合う学力になっていないのではないかという懸念材料がありまして、とりわけ普通科等については推薦がなくなった、あるいは職業科あたりも割合が少し減少傾向になっているのかなと。

そこで、ご当校で推薦50%の生徒と一般入試で入った生徒の追跡調査というものはなされているのか。例えば先ほど成績不振者で数学、物理あたりで、推薦と一般入試で入った生徒との比較とかそうしたものがあるのかどうか。これも中学校側にとっては、いわゆる理科、数学が本当に苦手な生徒で行きたいという子どももいるわけですね。そうしたときに、これはどれほどまで許容できるのか。そうしたことも含めて、推薦50%の追跡調査、何か資料があれば差し支えない程度で教えていただければと思います。

以上です。すみません、長くなりました。

【遠藤議長】 いかがでしょうか。質問の部分と含めて、またご意見がありました。お願いします。

【本江教務主事】 まず、本郷キャンパスでも追跡調査はさせていただいています。これまでの中学校の生徒の関係で、推薦で入学してきた学生についてはおおむね成績は良好なのですが、今ご指摘のとおり、推薦資格ぎりぎりのところで来た学生については、やはり調査書点と合わないかなと思うことがあります。

ただ、私どもとしましては、中学校の先生から推薦されているところを重要視してとりますので、若干そういうのはいますが、すべてそういう傾向ではないと把握しています。

【遠藤教務主事】 射水キャンパスです。

正確に毎年きれいにとっているわけではなくて、このところ入試制度が変更になっていますので、おおむねの傾向を言いますけれども、推薦で入ってこられた生徒、うちの学

生になっていただいたのは、真ん中辺もしくは若干上の辺に行って落ち着いた学生だということ。今後も推薦は行います。

ただ、大きな傾向は、以前は推薦で入った学生が各学科の1番等になっていました。それが今はもう明らかに学力で入った学生が1番ということです。それはここ4、5年ずっとそういう傾向があります。

また、補講対象の話ですけれども、これは射水キャンパスで補講しているのですが、推薦と学力の差というよりも、学科間の差が非常に大きいです。正直言いますと、商船学科と電子情報に理数系が苦手に入った子のフォローという形で、今、数学、物理の補講を行っているということで、推薦と学力で入ってきたということではなくて、落ちこぼれを出さないようにフォローしていきましょうという形で動いている。学科で入ってきているランクが違うので、そのことの方が大きい影響が出ているということです。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

次の「優れた教員の確保」という項目につきましては、私から意見を述べさせていただきます。ここを拝見したら、いろいろな取り組みをすばらしい形でやられているし、教員の博士、学位を持っていらっしゃる方々、技術士を含めてですけれども、この目標値を達成されていますし、すばらしいと思います。一方私も同じようなところで、悩んでいるところですが、教員の質とは何かという点です。統合されていて2つのキャンパスで百数十名の先生方という形になると、比較的コンパクトで意見をコミュニケーションしやすい面はあってもやはり大変なことは多いと思います。また最近では教員の仕事がどんどん増えてきていますよね。

専門性を高めると、専門のこと、自分の研究等々に走られる先生も多いでしょうし、いわゆる学生、教諭のケアといいますか、FDにしてもメンタルヘルスケアにしても、本当にさまざまな仕事をやっていかれるのを、しかもキャンパスが分かれているというのは、大変だと思います。教員を確保して、その教員にどのように大学の中で仕事をしていただいて、教員の教育も含めて、さまざまな工夫をされながらやっていらっしゃるけれども、その辺で何かお考え、コツを教えてくださいたいと思います。

【米田校長】 ぜひ統合大学の先輩である富山大学に教えていただきたいことはいっぱいありますが。

【遠藤議長】 お互いにいろんな悩みがありますよね。これ、正直だと思いますね。

【米田校長】 国立高専の先生方の多忙、繁忙というのは、51高専全体の重点取り組み課題になっているんですね。おっしゃるように、入り口から見ると、高等学校の先生のように、1年から3年に対処するときは特に、クラス担任もありますし部活動の顧問もあります。一方、出口といたしますか産業界等から見ると、しっかり論文を書いた専門性を持った先生方となると、大学の先生のように見えているのではないか、あるいは見えなければいけないのではないか。その先生が、自由裁量ではなくて、大学の先生ですと裁量労働制が適用されたりもするわけですけども、一般に変形労働時間制をとることはできても裁量労働制にはならないんですね。そうすると、ますます自由がきかない。振りかえ休日をとろうと思っても、どこでとればいいんだという話がどの高専でも起きています。

そういう意味では、多忙、繁忙に対してどう対処するのか、そのもとにある高専の先生の質とは何かというのは、本当によく見直さないといけない。ただ、難しいテーマだと思っています。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

私が思うのは、まさに今の大学や高専では、教員が一体何をしなければいけないのかという点が、非常に問われていますよね。うちは大学ですけども、教養教育のあり方が大きな問題となっています。高校生まで詰め込みの教育で、入試が終わって入ってきた大学生が教養教育を十分やる時間もなく、すぐに就活が始まってしまうという現実があります。大学で本当に教育できるのは、2年ぐらいしかないことは大きな問題です。だから、むしろ高専の方が、私の持論ですが、一貫した5年間でいい人材を育てられるのかなと思って期待していますので。

現在の日本の教育体制については、高等教育を含めた部分で非常に問題があるやに思うので、いろいろ悩みながら今後ともご相談をさせていただきたいと思います。

続きまして「教育の質の向上及び改善のシステム」、この辺も辛いところになってきますが、浜屋さんはいかがでしょう。

【浜屋委員(代理)】 私、こういう会に代理で出席するのはこれで2回目になるのですが、高専が統合されてもう3年目だということで、今回、年度計画を見させていただいていますが、非常にうまくというか、入り口から出口までしっかりとやっておられるなという感じがして、すばらしいなというのが私の感想です。

キャンパスが2つあって、生徒たちの交流も考えなければいけないし、ようやくそういうことにいろいろ力を入れられて、あるいは授業でもコラボをやっておられてというのは、

生徒にとっては非常に役に立つのかなという感じがしています。

私も先ほど遠藤学長が質問された、先生の評価をしたり、先生のピアレビューをしてそれに対してどうのこうのというのは、果たして先生方が自分の授業を非難されたときに変えられるものかなと思ったのですが、先生方も大変なご努力をしておられるのかなという感じはします。

いろいろ資格も取ったり、中学を回って生徒を募集したり、入り口から就職まですべてやっておられるのには非常に私も、私のところにいる会社の高専生徒も皆しっかりした生徒なので、それが伝統として生きているのかなという感じがします。

キャンパスが2つあって大変でしょうが、引き続き地道に交流を続けていっていただいて、文系であろうと理系であろうと、文系なら理系のことをちょっとかじるとか、理系の人だったら文系のことをちょっとかじるとかということで、人間形成を豊かにしていただいて社会に出していただければと思います。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

ご指摘のとおりだと思います。応援のメッセージだったと思います。ありがとうございます。

松田さんは「学生支援・生活支援等」のところはいかがでしょうか。

【松田委員】 先ほどからも話が出ていますように、先生方の努力につきましては大変敬意を表したいなと思います。これだけのものを実施なされているということは、なかなか大変なことだろうと思います。

実際に本当にこれがうまく行われているかどうかにつきましては、自分がこの任に当たったときに、いささか疑問が残るような気は持っています。

しかし、私どもの会社に勤めている高専の人、あるいは私の実際の息子も高専ですので、やってこられたことについては大変感謝もしています。

しかしながら、今、中高一貫校が出現しまして、従来の県立大学と学生の取り合いになっているかと思うのですが、このあたりで高専の置かれている立場が、どうもどっちかに引っ張られて中途半端になりかねないなという危惧をちょっと持っています。

そういった中で、何か高専らしいものやっつけていかなければいけないのではなかろうかなと思っているわけですが、このようなインターシップが68%という状況になっていることにつきましては、いささか数字が低いのではなかろうかなという感じを持っています。

これはちょっとご質問してみたいところなのですが、中高一貫校ができたということで、入ってくる学生の平均の点数が従来と比べてどのようになっているのかということが知りたいのですが、そのあたりをちょっとお聞かせ願えませんでしょうか。

【米田校長】 全体としては、おっしゃるように、どこの組織でもそうかもしれませんが、最近の学生は以前の学生に比べてぐんとできるのがたくさん入ってきているねという形では多分なくて、その辺どう言えばいいのか。

【本江教務主事】 確かに、学力レベル、知識レベルでは、倍率が上がればそれだけの知識レベルは維持できていると思っています。

ただ、今ご指摘いただきましたように、では、高専は中高一貫あるいは普通高校と何が違うかというところを前面に出せるかといいますと、私どもでは、知識量だけではなくて、特に出口が企業あるいは社会と直結していますので、社会人基礎力や人間力を育てるところが高専の一番大事なところではないかなと考えています。

そういう観点から、知識的なレベルはそんなに下がっていないと思うのですが、やはり社会的背景で、入学してくる学生の例えば積極性とか、コミュニケーション能力が不足してきていますので、そういうところを授業の中で、チーム学習等を取り入れて補うようには今努めています。

【松田委員】 このインターンシップの68%という数字はどうとらえておられますでしょうか。

【本江教務主事】 実は、先ほど副校長の成瀬から説明させていただきましたが、県のインターンシップ推進協議会にも私ども入っています。多くの大学が今、8、9月が休業期間になっていまして、企業はどちらかというところらに設定されるケースが多いんですね。そうすると、高専の本科生4年生については、実は8月のお盆前しか行けない状況になっていまして、来年度から学事日程で8、9といった休業期間を変更しますので、これまで以上にインターンシップには行きやすい状況を今作っています。

もう1つは、インターンシップだけではなくて、その間、ちょうど課外活動の全国大会などそういうものと重なる時期でもあります。どちらを取るかというのは非常に難しいのですが、なるべく今の50%をもっと超えて80%、90%に行くように努力していく所存です。

【遠藤教務主事】 つけ加えますと、4年生にインターンシップに行かせていますが、国際ビジネス学科、今で言うと国際流通学科ですが、その時期に環日本海諸国と英語圏、オーストラリア等への異文化体験実習、それも科目の単位になっていまして、それが夏にち

ようど設定されていますので、国際の学生はインターンシップに参加できない状況になっています。

そこで、今現在ですと、40名8学科とすると320名中40名が参加できない状況になっていますので、今後は、私は実際は六十何%ではなくて、行ける学生は80%以上は行っていると思います。高専の非常に大きな売り物ですので、今後もこれは充実していきたいと考えています。

【松田委員】 私どもの企業でも、人間力の向上というのは会社を推進していくために非常に大きなものだろうととらえています。人間力もどうすればいいのかということで、高専の方でいろいろ指導していただけないかなと思っています。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

では、松坂様、「教育環境の整備・活用」ということで、いかがでしょうか。

【松坂委員】 これを見させていただいて、設備のマスタープランなどをやられるのに、ワーキンググループ、さらにはタスクフォースまで形成されて頑張っておられるというのはすごいなとまず感じました。

まず、体育館の外壁や武道場の建具など経年劣化したものについてやられたということは大変大事なことだと思います。

その次に、地域人材開発本部が使用する部屋を作られたみたいな話ですが、これを作るのに、どうもいろんなものを移動されたり改善されたり、大変ご苦労されたのではないかなという跡が見受けられます。

また、身障者のためにエレベーターをつけたということも大変評価していいことではないかと思います。

ちょっと気になるのは、本郷キャンパスの2、3階廊下の窓に転倒防止用のハンドレールをつけたというのがあるのですが、これは何かあったからでしょうかということが質問といえば質問なのであります。それはまた後でお聞かせ願えればいいかと思います。

次にこれからのことですが、安全面のために、高い設備について、耐震環境、機能改善に重点を置いた概算要求や予算措置をとったことは非常にいいことだと思います。

前から出ていました省エネに関するものについても、一部購入して試行したとなっています。これはだんだん増やしていかれる前触れではないかと思っています。これは前のときに私はぜひ進めていただきたいという話をしていましたので、よかったと考えています。

練習船の使用のことですけれども、学校のホームページを見せていただきますと、校内の実習や研修のほかに、一般航海、外部の研究調査への協力、他大学の方の体験航海など、いろんなことをきっちりやっておられることがよく見えます。それも大変いいことではないかなと思っています。

エコアクション21ですけれども、3年間にわたって私はいろいろ話を聞きましたけれども、いよいよ24年度には両方のキャンパスが一緒になって物事を進めていくということで、大変いいことだと思っています。くどく言うようですけれども、こういうことができれば、これを審査する人が内部から出ればもっといいなと思っています。

最後の学生、教職員の健康の安全管理についてですけれども、中を見てみると、各種講演会や講習会をたくさんやっておられるし、また外部からの方を呼んで、素晴らしい講演を聞いた、この最初の頭のところにありますけれども、そういうことをして頑張っておられる様子がよく分かります。

実習時における発達障害学生への支援も、なかなかいいところまできちっとやっておられると非常に評価したいと思っています。

最後にインフルエンザのことですけれども、前にも私の会社の例を申し上げましたけれども、インフルエンザの接種というのは70%ぐらいになるというのは、私の会社も全く同じだったのですけれども、インフルエンザの接種というのは、1つは各自の感染防御、2つ目は集団に対する流行の阻止ですので、もう少しこの率を上げていただけたらいいなと感じています。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

ご質問も含めて、いかがでしょうか。

【丁子副校長】 先ほどご質問があった転倒防止ですけれども、これは事故があったわけではなくて、校舎の耐震等で改修したときに、できるだけ明るくしようということで窓の腰を低くしてしまったもので、後からこれはちょっと危ないのではないかということで、転倒防止の手すりを設置したという経緯があります。

そのほかにも、事前にそういう危険な場所がないか、毎月1回巡視をしてチェックをしている。そのときに気がついたところを順次、関係の委員会に諮って改修していくとか、いろんな段取りを取っています。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

話題は尽きませんが、予定より30分ビハインドしています。教育のところは最大の課題だと思って、時間をとりましたが皆さんのご意見はお聞きできたと思っています。本当にご努力されておられ、それをさらに進めていただくことを期待したいと思います。

では、研究にまいらせていただきます。

資料のご説明をお願いします。

【丁子副校長】 「2 研究に関する事項」を私から説明させていただきます。

基本的に研究の活性化、先ほど校長の説明の中にもありましたけれども、出口側から見ると、やはり研究成果を挙げて、地域、産業界との共同研究が重要になってくるということで、研究活動を促進して、その成果を教育に反映させるといった使命を高専が持っているということで、その活性化をするために、地域人材開発本部の中の地域イノベーションセンターが中心となっているような施策をやっているということで、できるだけ論文発表、英文校閲、国内外での学会発表、シンポジウム等、どうしても予算が必要なものについては、予算がないからそういうことができないということがないような取り組みを行っています。

どうしても1人で取り組んでいると、なかなか研究が進まないという傾向がありますので、できるだけ何人かの教員がチームを組んで成果を挙げるといった体制のために、「チーム育成」というような事業もやっています。

積極的に産業界との情報交換、そこから新たな共同研究のテーマを見つけるということで、グリーンイノベーション研究会というものを昨年立ち上げて、既に6回重ねています。毎回いろいろと産業界から、シニアフェローの方にも来ていただいて、本校の教員の研究に対していろいろとアドバイスをいただきながら、産学連携の研究につながるようなこともやっています。

学術的な研究ということで、文部科学省等の科学研究費もあります。こういった競争的資金の獲得に向けても、いろいろと手配をしながら採択率の向上を目指しているところです。

7/9ページ一番上の②の項目ですけれども、産業界ばかりではなくて、地方公共団体との連携も図るということで、既に黒部市、射水市と包括協定を結んでいます。

学内ばかりではなく他高専との、特に東海北陸地区の高専との連携を強めて、そこでの知的財産の取り扱いについて連携を図っていくということ、それから高専生が多く編入学していきます長岡と豊橋の両技科大との研究の連携も図りながら、いろいろと研究の活

性化、高度化を図っているところです。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

時間の関係もありまして、先に「3 社会との連携，国際交流等に関する事項」につきましてもご説明をいただけますでしょうか。

【成瀬副校長】 では、よろしく願いいたします。

7/9ページの「3 社会との連携，国際交流等に関する事項」ということで、基本的には、社会との連携等については地域人材開発本部が中心となって整備しています。

例えば公開講座、出前授業、これはどの大学でもやっておられますけれども、できるだけこれを早い段階で各ところにお示しして参加していただくことを企画しています。

特に③小中学校の理科教育の支援ということで、各小中学校にこういうことができますよということをあらかじめ早く示して、ぜひ参加、必要な講座があればおっしゃって下さいという形で、今地域人材開発本部が行っているところです。

夏休みのサイエンススクエアや県立大学のダ・ヴィンチ祭にも出展させていただいて、貢献の一端を担わせていただいています。

2つ飛びまして国際シンポジウムですが、先ほども校長から説明がありましたけれども、学生向けの国際研究集会ということで、今年度、タイのキングモンクット工科大学というところでI S T Sを開催しまして、専攻科の2名が発表を行っています。

シンガポールのテマセク・ポリテクのカレッジがありますが、そこでI S A T Eを行っています。そこに本校の教員が国際研究集会で発表するということです。

次、⑦の海外インターンシップ、留学生の受け入れ等ですが、現在、本校から短期で海外留学を進めています。特に海外の企業へインターンシップに行くというところを積極的に今進めているところです。3月も実際に行く予定を立てています。

受け入れにつきましては、短期、長期とありますが、特に短期の留学生を受け入れたいということで、今年度につきましては幾つか計画がありましたが、震災等の関係もありまして、1月にシンガポールのポリテクの学生2名を受け入れまして、1カ月間、研究指導を行っています。こういう形で、さまざまなアジアの学生を受け入れて進めていきたいと思っています。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございました。

研究面、それがさらに広がって社会との連携、国際交流という視点で、最初に、研究を中心に石塚先生からコメントをいただけますでしょうか。

【石塚委員】 よくやられていると思います。細かいことですが、論文発表や英文校閲や国内外での学会発表を支援することはものすごくよくて、科研費の採択も新規が11件あるのはすばらしいと思います。これはうちも同じなのですが、システムを作って、大体利用する人は活発な方だけなんです。論文を書かない人は徹底的に利用しないのです。だから、底上げをどう図るかというのはうちも同じで、活発な方にはすばらしい。特に特許なども1年に6件という明確な数値を出されているというのは、さすが高専さんだと。我々はとてもこういう数値は出せませんので、そういう点はすばらしいと思いますし、それからちょっとこれからずれますけれども、国際シンポジウムや海外インターンシップなども、グローバルという点では時代に合ったものだと思いますので、ぜひ進めたいと思いますが、先ほど言いましたように、底辺を広げるというか、これは別に高専だけではなくうちでも問題になっていますが、このところをちょっと見ていただければと思います。

【遠藤議長】 ご指摘のところは、まさに社会全体の課題かもしれません。

では、正橋さんはいかがでしょう。

【正橋委員】 今年の4月にも御校から1名入社していただきまして、どうもありがとうございます。

私は社会との連携、国際交流等に関するところですが、特に社会との連携の部分で言いますと、今もちょっと出ましたが、小中学校等に出前授業をやっている。この部分は多分、小中学校等の関係でも結構大変な部分があって、ご調整などにいろいろ苦労されているのではないかと思います。

恐らくこういう企画は、受ける学生、小中学生の皆さんもそうですけれども、親もわくわくしてくるようなことではないかと思うので、ぜひ広げていって、いろんな体験を小さいときからさせて、技術や科学に興味を持っていただくような活動は継続していただきたいなと考えています。

もう1点、企業の人材育成ということで取り組みを始めていらっしゃいます。企業側もどのように高専とやっていけばいいのかというところは、まだ模索のところかと思いますが、何か新しい方向性を高専として出せるようでしたら非常におもしろいかなと思います。

特に先ほどから人間力が不足しているというお話が各者から出ていまして、全く同じだ

と思います。しかも企業側はマネジャークラス、いわゆる「プレイングマネジャー」という言い方で、実務を持ちながら大変な業務量をこなしていると。その中で、本来やるべき人材育成になかなか手が回っていないというのが実態だと思うので、それをいかに早いタイミングからできるかというところも課題だと思っていますので、ぜひそういうところに役立つような仕組みを作っていただければと思います。

国際交流に関しては、まず日本人で言いますと、留学生、海外に行っていただくというケースがあると思いますが、恐らくこれは国際流通とかそういうところの方が多くはないかなと思ったのですけれども、むしろ技術を学んでいっしょの方もそういう経験を学生の間にしていただくことで、本当にこれから「グローバル」という言葉が当社でも大きく出てくると思いますので、そういう経験というか感性をちょっと感じてきていただく学生にぜひお願いしたいなと考えています。

同じく当社の海外の拠点でも、こちらの学生をインターンシップ等で受け入れることは検討させていただきたいと思っていますので、ぜひこちらも継続してやっていただきたいなと思います。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

学校側からありますか。

(発言する者なし)

【遠藤議長】 では、今までのところで、人間力を何とかという言葉が松田様から最初出て、今、正橋様からも出て、高専だからこそその特色がいろいろあると思うんですね。そこで、皆様から、人間力を育成するために高専に何をやってほしいかという具体がありましたら遠慮なく挙げていただいて、これをここのパートの締めにしたと思っていますけれども。

【米田校長】 今の正橋委員のお話に関連して、国立高専機構がこれから力を入れて取り組んでいくべき方向性の中でキーワードを2つ挙げるとすれば、共同教育とグローバル化対応、グローバル人材の育成なんですね。

ということで、企業の人たちと文字どおり共同して、学生なり企業技術者なりの育成に取り組む。そのような取り組みを積極的にこれからは進めていこう。

それから、さんざん出ていますが、グローバル化にどう対応するか。海外インターンシップはぜひ推進する方向でということで、本校もその方針に従う形で取り組んでいます。

またご協力していただける部分もあるということで、よろしく申し上げます。

【遠藤議長】 後ほど懇談の場もあるようですので、これはその場で話し合っただければと思いますので、次に行かせていただきます。

管理運営とその他とⅡ、Ⅲ、まとめてご説明いただけますでしょうか。

【米田校長】 私から簡潔に説明させていただきます。

8/9ページ、「4 管理運営に関する事項」があります。

戦略企画会議あるいは企画提案ワーキンググループもありますが、中長期的な戦略、直近の戦略について議論して進めています。

校長裁量経費を少し持っていまして、戦略的に配分するようにしています。

この会がそうですけれども、外部有識者による意見も学校運営に適切に反映させていくということでやっています。

情報システムの見直しについても、省エネの観点もありますけれども、情報の一元化という観点から、そういうシステムの導入、これは機構本部も力を入れていまして、それに乗っけていこうということです。

先ほどもちょっと出ましたけれども、技術職員も含めた教職員の表彰制度を導入してインセンティブを高めていこうと考えています。

これが8/9ページです。

9/9ページになりますと、教員の交流、高専間交流、技術科学大学との交流、これは積極的に進めていく。

全体の「5 その他」になりますけれども、教員を本科あるいは一般教養科のほかに、専攻科あるいは地域人材開発本部に3センターがありますが、それらに専任の教員を配置しています。これは、統合し高度化再編した4校の教員数が現在はそういう配置のゆとりを持っている、そういうものを配置しているということです。

大きなⅡ番ですが、業務運営、これは独立行政法人でありまして、給与相当額を除くと、中期目標の期間中、毎年度1%の効率化係数が係っています。研究費あるいは教育に充てるお金が少しずつ減っているという状況の中で、何とか公的な資金、競争的資金に手を挙げて、それを獲得しながらやっていくという状況になっています。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

この件に関しては本当にご苦労されていると思います。

私から1点だけ教えていただきたいのですが、人件費比率は何%になるのでしょうか。すごくいろんな事業をやられていて、しかも教育研究費は前年度並みを維持しつつ管理経費5%削減でという予算を組まれているようなのですが、人件費比率はどれぐらいでやっていますか。

【米田校長】 人件費とおっしゃるのは、教職員の月給等のことですか。

【遠藤議長】 ええ。全体の学校予算の中で。

【飯嶋事務部長】 高専機構全体のスケールメリットを生かすという形で、平成23年度から、人件費に関しては機構本部が全国の高専全体の面倒を見るという形になっていますので、本校を含め各高専にはその辺の数字等は出てきていません。

ただ、人件費等の構成につきましては、国立大学等と同じような比率ではないかなと思います。ですから、人件費相当の総予算に占める部分とすれば、やはり相当大きいものであると考えます。

【遠藤議長】 そうしますと、これは高専のご事情がいろいろあるから全国規模で動かれているので、例えばさまざまな事業を展開するときに、新たな非常勤の方とかを雇うとする場合には、そのお金は機構全体の中で処理されるのですか。

【米田校長】 上限がありまして、例えば非常勤の講師を雇うという場合は、その上限以内であれば機構本部が持っているお金で措置されます。それを超えると、それぞれの運営交付金の中から各高専が出しなさいということになっています。

【遠藤議長】 分かりました。事業内容を拝見すると、大学の我々の立場から言うと、本当にやりたい事業をある一定のお金をつけながらやっていますし、施設の整備についてはいかがですか。

【米田校長】 施設に関しても……

【遠藤議長】 大学関係は本当に今、新規の建物をどう建てるか、目安がたちません。文科省は耐震基準に至っていないものだけは建て直すけれども、それ以外のものには当面手をつけられないと言ってきています。これが国立大学の、国家予算の、厳しい状況です。

【米田校長】 国立高専も施設概算要求がもちろんありまして、ただ、今先生がおっしゃるほど全く何もかもだめではなくて、やはり耐震基準に満たないものを最優先にしながら、一般の改修みたいなものは順次入ります。1校に1件ぐらいずつかと思いますが、あるいはそれよりもちょっと率は悪いと思いますけれども、そういうものを行っています。

【遠藤議長】 分かりました。ありがとうございます。

ご苦勞の中でありますけれども、ぜひ予算配分をうまくやられて、なお活動の実を上げていただきたいと思います。

全体を通しまして、委員の先生方、何かご意見がありましたらよろしくお願ひしたいと思ひます。

【石塚委員】 意見というか質問したいのですけれども、先ほど教員の質ということで、原則博士を持っているとか、我々設置審のルールに沿ってやっていますが、高専は必ずしもドクターでなくてもいいわけですよ。

【米田校長】 はい。必ずドクターでなければいけないという……

【石塚委員】 先ほど高専の方の何かオリジナリティーとかといったときに、例えばものづくりということであれば、設計の得意なオピニオンリーダーみたいな方がいれば、建築の安藤さんまではいかなくても、どうなのですかね。

【米田校長】 機構本部がガイドラインを示してしまひて、専門学科の教員は博士の学位を持っている比率が70%という目標が上に掲げられてしまひて、そのとおりかどうかは別として、程度ということがあります。本校の場合は、先ほど説明しまひたように、専門学科に教員を採用する際に、博士の学位を有していることを条件にして公募してしまひます。

【石塚委員】 そういうふうにしてしまひるわけですか。

【米田校長】 それでもって持っている人の比率を7割に近づけていく。さらにはそれをクリアしていく。

【石塚委員】 ドクターだけではちょっと人間力が見れなくなつたと最近しみじみと。

【米田校長】 技術士を博士と同等に扱おうよということ。

【石塚委員】 私個人的には、それはすばらしいと思ひますね。

【遠藤議長】 そうですね。

恐らく議論は尽きませんが、ここでちょっと時間の都合上とめさせてしまひて、残りまひた質疑あるいはご意見等の交換はこの後の会でお願ひできればと思ひます。

米田先生から何かここまでのところでコメントはありますか。まとめとして。

【米田校長】 大変結構なご意見をちょうだいしまひて、ありがとうございます。

中には、辛口というよりは褒めていただひたことも幾つかあつたような氣もしまひますので、いただひた意見は今後のPDCAの参考にさせてしまひたいと思ひます。

(4) プロジェクトの紹介

①ALL SHOUSEN 学び改善プロジェクト

②国際的に活躍する実践的な技術者への「ロードマップ」プロジェクト

【遠藤議長】 それでは、今日はその他の話題としまして、23年度計画で取り組まれた2つのプロジェクトについてご紹介いただければと存じます。

【遠藤教務主事】 まず、このプロジェクト全体図をご説明します。

高専機構は、高専改革推進経費とあって、高専の教育面、国際化、情報発信事業の3つで、ユニークな将来を見据えたプロジェクトをやってみませんかということで公募をかけまして、今年度、富山高専から教育改革と国際化ということで2つのプロジェクトが認められました。両方とも2年計画のものです。

1つが「ALL SHOUSEN 学び改善プロジェクト」、これは教育関係のものです。もう1つが、この後別の者が説明しますが、「国際的に活躍する実践的な技術者への『ロードマップ』プロジェクト」というものです。これは国際化の推進ということです。

私の担当は「ALL SHOUSEN 学び改善プロジェクト」です。

資料をめくっていただきますと、7ページのものを書いてあります。時間も押していますので、3分ぐらいで説明させていただきます。

1枚目に大体まとめていますが、「ALL SHOUSEN 学び改善プロジェクト」、副題が「商船学科におけるわかりやすい学び、定着する学びを目指して」です。

商船学科なるものが、海運界30年の流れの中で教育自身もかなり変革してきまして、それ自身に、教育現場、教える場が、システムとして、また学術的にも対応がうまくとれていないのではないかとということで、そこを整理しましょうということでやる2年間のプロジェクトです。

特徴は、5つの高専にある全商船学科と外部海事関連団体、今日ご出席の全日本船舶職員協会並びに船首協会、そこが「ALL SHOUSEN」というチームを組んで、商船学科学生が何をどのように学んでいけばよいかを明確に示す学びの分かりやすい道筋の構築と学力の定着を促す質のよいコア教材の開発に取り組むというものです。

今現在行っていますよということをご報告させていただくということです。

めくっていただくと、2ページ目に全体像、プロジェクトの概要図が出ています。これが一番分かりやすいかと思います。

一番下の部分が「ALL SHOUSEN」というチームを高専の全商船学科と外部海事

関連団体で組んで、そのメンバーが2年間取り組みながら、右側の三角で書いてある「定着する学び」、いわゆるコア教材の開発、左側が「わかりやすい学び」ということで、その道筋を示すようなものを少し作っていきましょう。

出力が上側に出ている4つで、コア教材の開発、フォーラムの開催、商船学科におけるコア・カリキュラムの開発にも取り組みましょう。また、「学習ワークブック」なる15歳から20歳ぐらいまで勉強するその道筋を示したような教材を作り、最終的には海事分野が求める人材の育成機能を高度化しましょうということです。

3ページ目がその実施体制です。本当にやっていますよという証拠みたいなものです。

次が4ページ目、めくっていただくと、一部の人間だけがやっているのではないかといいことで、それに対して名前を入れながら、5つの学校、船首協会、全日本船舶職員協会、ここに松坂様のお名前も入っています。もう1つ特筆すべきが国際交流、以前から国際のインターンシップなどを商船学科もハワイのカウアイ・コミュニティ・カレッジでやっていたのですが、これはハワイ大学の1つのカレッジですが、そこのメンバーと一緒に英語教材の開発も技術的な交流事業の実質化として行っているということです。

事業の工程表が5ページに出ています、昨年度10月にハワイのカウアイ島にあるカウアイ・コミュニティ・カレッジで交流会を行いました、そのときの各コミュニティ・カレッジの学長、キャンセラーというかチャンセラーが自分のところのコーナーに書いたものを証拠として6ページに記載するとともに、最後の7ページがコア教材の開発ということで、2年間で5、6冊、必要で不足している教科書を作りましょうと。それをマリタイムカレッジシリーズとして、商船学科の学生に向けて明確に分かるような形で出版していきましょうということで、第1弾として『船舶の管理と運用』がこの2月に出版しました。

左側は、カウアイ・コミュニティ・カレッジで行った国際交流会の小冊子として、関係の先生方を含めて配付しているということです。

これを2年間行いながら、商船学科のカリキュラムが、学生にとっても教師にとっても見やすく学びやすいものになっていけばと。それを目指して活動しています。

簡単ですが、「ALL SHOUSEN 学び改善プロジェクト」のご紹介をさせていただきました。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

ご質問等ありますか。

松坂様、よろしいですか。「ALL SHOUSEN」の話。

【松坂委員】 今、資料集めに一緒に一生懸命やっています。

【遠藤議長】 分かりました。ありがとうございます。

「ロードマップ」のプロジェクトについてもご説明願います。よろしく願います。

【梅センター長】 それではよろしく願います。

裏表のカラーのチラシをご覧ください。

「国際的な技術者へのロードマッププロジェクト」と称しまして、背景としましては、校長からも説明がありましたが、国際的な意欲を持った専門家の排出というのは企業からも急務であると言われていまして、私ども高専機構や各高専も国際交流や留学の開発は鋭意進めています。

ただ、それらが人材育成のために体系的に提供されて、きちんと学生全体に取り組みとして有効に定着しているかどうかというのは、ちょっと振り返ってみる必要があるかなということで、こういったプロジェクトを表面の下にある10校連携で提案しています。これを「ロードマッププロジェクト」と称していまして、富山高専でリードさせていただいているものです。

概念ですが、裏面をご覧くださいと思います。

「国際的に活躍する実践的な技術者への『ロードマップ』－卒業生・留学生・地域企業に学ぶ、自ら学ぶ国際性－」と称しています。

ちょっと原点に立ち返りまして、なぜ国際性が必要なのか、何が求められているか、スキルであるのか、意欲であるのか、どういう学習の機会があるのかを低学年からきちんと分かるようにしっかり可視化することにまず最初に取り組みます。

学生の自主的な取り組みの環境を整えた後で、学生がどのように学んでいくのかということ継続的に支えていこうという、国際性を育むための自主的・体系的・継続的な学びの実体化を目指しています。

枠組みは1、2、3のステップになっていまして、1番では、もう既に高専機構や連携学校はいろんな事業を開発しています。そういったものをまず集めて、さらに3つの新事業を展開しています。

1つ目が、「卒業生に学ぶ」と称しまして、実際、本校を出られたいろんなOB、OGの方にインタビューをしまして、海外で活躍するためにはどんなことが必要なのか、意欲としてはどういうものが必要なのかということ調査しています。これを本年度末までに

一度テキスト化して、学生に見てもらえるようにしています。

もう1つが、本校にも留学生がいますので、その留学生の母国、なぜ海外で学ぶことを選んだのか、モチベーションなどを留学生を通して学んでいくというものです。

3番目が「地域企業の海外展開に学ぶ」。富山県内企業でも非常に海外展開を進めておられますので、そういった企業から海外展開の意義等についてご講演いただくとか、できましたら地元企業にお願いして、海外事業所でのインターンシップを体験させていただくことを今ご相談している最中です。

ラインステップとしては、これをリーフレットやウェブ化しまして、低学年にも見える化する。それを見まして、第2ステップは、学生自身が将来どういったステップでこういった国際性を身につけていくかを紙に書き出してみる。将来どういった企業人になろうかという目標を持ってもらってというのが「ロードマップ」と呼んでいるものです。

これら目標を立てた学生をいかに支援していくかというのが第3番目のステップです。

こういった活動を通しまして、地域と海外を結ぶ意欲のある学生、地域企業が海外に展開している事業をぜひ担いたいと手を挙げるような学生を排出していきたいというのが本プロジェクトの目的です。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

議論を重ねてきました。

最後に、議長としては、今2つのプロジェクトをご説明していただきましたけれども、まさにこの取り組みの中に国立高専機構の中にある富山高専の存在感といいますか、事業の展開の素晴らしさを感じます。プロジェクトを実施する時、目標を作って戦略的に動ける高専機構の中の富山高専の姿、やはりすごいパワーを持っている組織だと思います。

大学などではできないことをやって、社会への人材をしっかりと作っていただければと私は思います。

23年度のすばらしい業績に敬意を表しまして、この会を閉じさせていただきたいと思えます。ありがとうございます。

4. 閉会挨拶

【飯嶋事務部長】 どうも長時間にわたりまして、熱心にご審議いただきましてありがと

うございました。

以上をもちまして、平成23年度第2回富山高等専門学校運営諮問会議を終了させていただきます。

閉会に当たりまして、米田校長から皆様へのご挨拶を申し上げます。

【米田校長】 どうも長時間にわたりご議論をいただきまして、コメント、アドバイスもちょうだいしました。ありがとうございます。

いただいたアドバイス、コメント等は、PDCAを回していく際に参考にさせていただき、活用させていただき、それで本校の運営を少しでも改善させていきたいと思っています。

高専の役割はまだまだあると思っています。今ほど2つのプロジェクトを聞いていただきました。時間のない中、本当にありがとうございます。遠藤学長先生にも言っていただきましたけれども、高専のこれから取り組むべきものがある意味凝縮されたようなプロジェクトであると私どもも思っています。

これからも高専は頑張ってまいりますので、ご理解、またご支援のほどよろしくお願ひしたいと思います。

本日は本当にありがとうございました。

[閉会 午後0時15分]